

Nara National Museum

奈良国立博物館 だより

第48号

平成16年 1・2・3月



国宝 七支刀(裏)



国宝 七支刀(表)

特別陳列

大和の神々と美術
七支刀と石上神宮の神宝
1月4日(日)～2月8日(日)
東新館

平常展

佛教美術の名品
1月4日(日)～ 本館・西新館
中国古代青銅器
1月4日(日)～ 本館

特別陳列

お水取り
2月17日(火)～3月21日(日)
東新館

大和の神々と美術

いそのかみ

じんぐう

しんぱう

◆会期

平成十六年一月四日(日)～二月八日(日)

◆会場

奈良国立博物館 東新館

◆主催

石上神宮

◆協力

奈良国立博物館

◆後援

東新館

◆後援

天理市教育委員会

七支刀と石上神宮の神宝

石上神宮は、大和盆地の中央東寄りの天理市布留町に鎮座する日本最古の神社の一つで、古代から多くの神宝が納められています。この特別陳列は、それらの至宝を一堂に会して、神宮の成立と信仰形態の変遷を紹介しながら、日本古代史の一端を考察し、あわせて神道美術も鑑賞できるように企画しました。石上神宮は『日本書紀』に記された由緒ある神社で、東アジアと

の交流を物語る七支刀などが伝えられています。この七支刀(国宝)は、身の左右に各三本の枝刃を段違いに作り出した特異な鉄剣で、「泰□四年・百鍊鋼七支刀」の銘文が刻まれ、最初の二字を中国の東晋の年号、太和とみて西暦の三六九年に作られたとする見解が一般的です。『日本書紀』によれば、神功皇后の五十二年に百濟から七支刀がもたらされたとあり、それがこ

の鉄剣と考えられます。倭(日本)は、そのころから百濟と密接な関係をもち始めますが、七支刀はその国際交渉を物語る重要な歴史の資料です。

また、石上神宮には立ち入ることのできない禁足地があります。この地は明治七年(一八七四)に大宮司の菅政友により発掘され、神劍とともに各種の勾玉や管玉、環頭大刀把頭、銅鏡などが出土しました。神劍は本殿に奉安されていますが、それ以外の出土品(重要文化財)は別に保管されています。

これらの出土品は古墳時代前期の副葬品と類似し、古代の神社の信仰形態がうかがわれる貴重な遺品です。この他に神宮には古墳時代の鉄盾(重要文化財)や室町時代の色々威腹巻(重要文化財)、中世の刀剣などの優品も伝えられています。以上の宝物は、普段は公開されていませんので、今回の展覧会はそれらを見ていただける得難い機会であり、仏教伝来以前の日本古来の文化を理解する上にも意義深いと思われます。



◎色々威腹巻



◎鉄盾



◎勾玉



◎環頭大刀柄頭、銅鏡など

お水取り

み
す
と



香水分壺（東大寺）

「お水取り」は、奈良・東大寺の二月堂でおこなわれる仏教行事です。行事のなかに、井戸（若狭井）から水を汲んで本尊にお供えるという次第があることから「お水取り」と呼ばれます。が、仏事としての正確な名称は「修二会」です。旧暦の二月一日～十四日に執りおこなわれたので、その名があります。

現在は三月一日から十四日かけておこなわれ、数多くの参詣者を集めています。参詣者にとってのクライマックスは、二月堂の欄干で振られる大きな松明です。この松明は本来、参籠する僧が宿所から二月堂へと上堂する際に足元を照らす灯りなのですが、これが欄干で振られると大きな火の粉が空中に飛び散り、その瞬間、寒空のもと

屋外で参拝する人々の歓声がどうと上がりります。しかし、仏事としての「修二会」行法の目的は、火の粉を散らすことでも水を汲むことでもなく、仮の前に自らの罪過を懺悔すること（悔過）です。二月堂の本尊は十一面觀音菩薩で、修二会においておこなわれる行法は「十一面悔過」です。

現在、二月堂の内陣には大觀音・小觀音と呼ばれる大小二体の十一面觀音像が、それぞれ厨子に収められ安置されています。二体の觀音像はいつの時代からか秘仏とされ、参籠する僧たちであつても拝することはできません。私たちは十二世紀にこの小觀音像を見た人物が描いた画像にて、その姿を想像するしかありません。

ところで、この修二会が持つ最大の歴史的意義は、天平勝宝四年（七五二）に創始され以来、一度も絶えることなく「不退の行法」として実施され続けているという点にあるでしょう。『東大寺要録』には、東大寺の初代別当良弁の弟子である実忠和尚が初めて十二面悔過を執行したことが記され、二月堂自体も彼の創建になると伝えられています。

さて、当館では東大寺で修二会がおこなわれるこの時期に合わせ、「お水取り」展を企画いたしました。今回は特に礼堂でおこなわれる作法に注目し、声明にかかる資料を軸に展示を構成

します。どのような空気の中で行法がおこなわれるのか、皆様にそれを体験していただきたいと考えています。

【主な出陳品】◎香水分杓、繞〔堂司鈴〕、◎二月堂修中練行衆日記、二月堂縁起、二月堂曼荼羅、十一面觀音像（以上東大寺）、二月堂お水取り絵巻（個人）、紺紙銀字華嚴經〔月堂焼経〕（当館）

◆会期 平成十六年二月十七日（火）～三月二十日（日）
◆会場 奈良国立博物館 東新館



◎類秘抄（当館）



◎二月堂本尊光背（東大寺）

展示評



天平の残香を感じて — 第五十五回正倉院展見学記 —

大阪大学大学院文学研究科助教授 高橋 照彦

「外からみる奈良博」

実のところ私は、二年前まで奈良博に勤務し、この正倉院展を準備・

開催する「内」側の一員であった。身の引き締まる思いをしながら、貴重な宝物の借用のために正倉院に日参した日々は、既に懐かしい。

正倉院展に自らが携わるまでは、まったく想像できなかつたが、この正倉院展に注がれる労力は並大抵のものではない。昨今の博物館では梱包・運搬などを学芸員みずからが行なわないことも少なくないが、正倉

院展ではそのほとんどすべてが、総動員された奈良博の館員の手にゆだねられる。しかも、見た目以上に脆い宝物群の扱いは、神経を磨り減らす作業の連続である。もちろん、借用から返却にいたる二ヶ月間以外にも、その準備のためには、他の展覧会などの企画と併行しながら、一年の半分近くの月日が費やされる。華やかな展覧会の裏には、奈良博や宮内庁正倉院事務所を初めとする多くの人のための努力が隠されている。

観覧者側の立場から、その労苦に改めて敬意を表したいと思う。

さて、今年の正倉院展であるが、数年前からの前売券の販売により券売所前の長蛇の列は幾分なりとも解消へと向かい、東西新館を用いた展示室によつて、観覧条件の改善につながつてゐるようである。茶室の公開なども含めて、施設や対応面での改善には心が砕かれていると思う。

展示室内で眼を引いた点としては、瑪瑙の壺など、展示台や照明の工夫によつて、実に見事にその材質の美しさが引き出されていてことをまず挙げたい。褥や幡などの部分拡大写真も、鑑賞者への配慮として的確に配されていた。撥鏽の尺では、鑑賞者の関心を考慮し、絵柄の興味深い裏側を優先してみせていたのも、展示方針として私には好感が持てた。

出品内容の選定は、宮内庁正倉院事務所が行なつてゐるので、奈良博は関わらないが、美術品ではないためになかなか展示の機会に恵まれなかつた丹や銀泥・雲母粉などが展示された点も、今後の正倉院展の一つ

の方向性を示すものとして、個人的にはむしろ好ましく感じた。

若干気になつた点をあげるとすれば、展示品解説の内容である。例えば白瑠璃高壺や瑪瑙壺は、日本製であることが強調されていたように感じたが、これはどれだけの根拠に裏付けられているのであろうか。日本における瑠璃や瑪瑙の製品は玉類が中心であり、形態面から日本製の焼き物などと比較しても、白瑠璃高壺などを日本製とするには、技法や材質における積極的な識別基準がいま少し必要に思う。

同様に鉛丹については、絵の具・ガラスの原料とされており、特に前者の用途が重視されていたようである。確かに丹が顔料として多用されたのは一般論として間違いないものの、この一連の鉛丹の包み紙や布袋から唯一直接的に知ることができるのは「玉瓦料」としての用途であり、その点には図録でも特に言及がない。玉瓦は「玉と瓦」の意味ではなく、瑠璃玉のような瓦、すなわち三彩などの施釉がなされた瓦を指しており、釉薬原料としての用途も無視できない。小斤という、いわば精度の高い単位で重量の書き換えが行なわれたのも、厳密さを要求する釉薬などの調合を考えると納得しやすいし、使用することなく大量に留めおかれた謎も、そこから解きほぐせるようと考えている。

少々瑣末な点に立ち入りすぎたかもしれないが、誤解がないように付けて加えておくと、上記の解説ももちろん間違いとは言えず、その他のいづれの解説も既に高いレベルにあると思う。それゆえに、残されたごくわずかな課題として、今後への期待を兼ねて記したものである。

正倉院展は、天平の残香を感じるまたとない機会として、これからも多くの人々を魅了してやまないことだろう。今後の正倉院展が、良き伝統を継承しつつ、時に、より新しく脱皮していくことを期待しまだそれを応援していきたい。

サンフランシスコでの 『高麗時代の美術展』に協力



「高麗時代の美術展」は、サンフランシスコ・アジア美術館が市中心部へ移転して最初の特別展として、二〇〇三年十月十八日から二〇〇四年一月十一日まで開催されました。韓国の長い歴史の中でも、高麗時代は仏教に裏付けされた芸術性の高い文化を生み出した時代として知られており、その栄華を伝える仏画・仏像・陶磁器・金工・漆工等の名品の数々を二堂に集めた展覧会が、アメリカの地で開かれたのは今回が初めてのことです。

日本からも、全国の美術館・博物館・寺社など名所蔵者からのご理解を得て、全体出陳数の三分の一以上に上る計四十五点が選ばれました。奈良国立博物館は、サンフランシスコ・アジア美術館からの委任により、日本からの出陳品に関する出陳交渉・輸送・展示・点検等を行う形で本展覧会に協力をしています。

あまたの出陳品の中で、今回最も多くの人々の関心を集めているのが、佐賀県唐津市・鏡神社所蔵の楊柳観音像です。縦五メートル近くにも及ぶ大きさは会場でも圧倒的な存在感を誇ることともに、観音の麗しい表情と透明感のある華やかな色彩が多く、観客を魅了しました。二〇〇年に高麗王朝のもとで描かれ、三九一年に鏡神社にもたらされ大切にまつられてきた楊柳観音像は、今回再び海を渡つてサンフランシスコの地まで赴き、高麗仏画の驚くべき芸術的水準の高さを多くのアメリカ人の目に焼き付けたのです。

当館は昨春、ニューヨークにおいて「日韓初期仏教美術展」を韓国・国立慶州博物館とともに開催しました。そして図らずも同じ年に再び当館が関わることになった「高麗美術展」もまた、アメリカに韓国仏教美術の魅力を広く紹介する端緒となつた展覧会として、今後も長く記憶されることでしょう。

件が出陳されました。奈良国立博物館は、サンフランシスコ・アジア美術館からの委任により、日本からの出陳品に関する出陳交渉・輸送・展示・点検等を行つ形で本展覧会に協力をしています。

あまたの出陳品の中で、今回最も多くの人々の関心を集めていたのが、佐賀県唐津市・鏡神社所蔵の楊柳観音像です。縦五メートル近くにも及ぶ大きさは会場でも圧倒的な存在感を誇ることともに、観音の麗しい表情と透明感のある華やかな色彩が多く、観客を魅了しました。二〇〇年に高麗王朝のもとで描かれ、三九一年に鏡神社にもたらされ大切にまつられてきた楊柳観音像は、今回再び海を渡つてサンフランシスコの地まで赴き、高麗仏画の驚くべき芸術的水準の高さを多くのアメリカ人の目に焼き付けたのです。

当館は昨春、ニューヨークにおいて「日韓初期仏教美術展」を韓国・国立慶州博物館とともに開催しました。そして図らずも同じ年に再び当館が関わることになった「高麗美術展」もまた、アメリカに韓国仏教美術の魅力を広く紹介する端緒となつた展覧会として、今後も長く記憶されることでしょう。

●公開講座 『大和の神々と美術 七支刀と石上神宮の神宝』●

1月24日(土)	①「七支刀とその時代」 ②「石上神宮の歴史的背景」	町田 章 (奈良文化財研究所所長) 和田 萬 (京都教育大学教授)
1月31日(土)	①「東アジアの国際関係と七支刀」 ②「石上神宮の禁足地出土品」	田中 俊明 (滋賀県立大学助教授) 井口 喜晴 (当館上級研究員)

※時間：①13:30～14:30 ②14:40～15:40 会場：講堂 定員：200名 聆講無料

●ギャラリートーク●

1月14日(水)	「七支刀と禁足地出土品」	井口 喜晴 (当館上級研究員)
2月11日(水)	「四天王と十二神将」	山岸 公基 (当館調査員)
3月10日(水)	「お水取りと若狭井」	野尻 忠 (当館美術室研究員)

※時間：14:00～ 会場：展示室 入館者聴講自由

●展覧会日程●

	1月	2月	3月
本館	平常展〔彫刻〕・〔中国古代青銅器〕(1/4～)		
西新館	平常展〔絵画・書跡・工芸・考古〕(1/4～4/4)		
東新館	特別陳列「七支刀と石上神宮の神宝」(1/4～2/8)	特別陳列「お水取り」(2/17～3/21)	

展示品の見どころ

七支刀

国宝
古墳時代(百濟時代、4世紀)
奈良・石上神宮



七支刀(表) 銘文

石上神宮の神庫に永く神宝として伝えられてきた鉄劍で、銘文には七支刀と記されている。鍛鉄製で、身の左右にそれぞれ3本の枝刃を交互に作り出す、特異な形状の両刃の劍である。表裏面の刃に沿う刃縁と枝刃の中央に金線が施され、両面にあわせて61文字が金象嵌の技法で表されている。象嵌の一部が剥落し、銘文をめぐって多くの研究がなされてきたが、現在は異論もあるが、およそ次のように解説されている。

(表) 泰□四年五月十六日丙午正陽造百練鋼七支刀□辟百兵宜供供侯王□
□□□作

(裏) 先世以来未有此刀百濟王世□奇生聖□故為倭王旨造伝□□世
最初の二文字については、中国の東晋の年号、太和と音が共通するところから泰和とみて、西暦の369年にあてる説が有力で、大意は、泰和4年に百濟王の世子(太子)が倭王のために七支刀を作ったと解釈される。また『日本書紀』によれば、神功皇后52年9月に百濟から七子鏡1面などとともに七枝刀1口が献上されたとあり、この七支刀がそれに該当すると考えられている。書紀の神功皇后52年(252年)は、120年を加えて年代を修正する方法によれば、西暦372年になり、ほぼその伝承が裏書きされることになる。4世紀から5世紀の朝鮮半島は高句麗、百濟、新羅と伽耶諸国が分立し、なかでも北方の高句麗が南下して、百濟と激しく対立していた時代で、倭国(日本)はそのころから百濟と緊密な関係を結び始める。この七支刀は、当時の東アジアの国際情勢を考える上に、欠くべからざる一等の歴史資料である。

(上級研究員 井口 喜晴)



七支刀(表) 全体

■開館時間 午前9時30分～午後5時、ただし1月11日(日)、2月3日(火)、3月12日(金)は午後7時まで(入館は閉館の30分前まで)

■休館日 月曜日休館
(ただし1月12日(月、祝日)は開館、13日(火)は休館、3月1日(月)・3月8日(月)は開館)

■観覧料金

平	大人	大学・高校生
一 般	420円	130円
団 体	210円	70円

*団体は責任者が引率する20名以上。

*特別陳列は平常展料金でご覧いただけます。



[交通案内] 近鉄奈良駅から徒歩15分、またはJR奈良駅・近鉄奈良駅からバスで「氷室神社・国立博物館」下車すぐ

『奈良国立博物館だより』は、1・4・7・10月に発行します。郵送をご希望の方は、何月号かを明記し、返信用封筒(90円切手貼付、宛名明記)を同封して、当館の企画室にお申し込みください。

 **奈良国立博物館**
Nara National Museum